
creations for the destruction

PINE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

creations for the destruction

【Nコード】

N5562J

【作者名】

PINE

【あらすじ】

求神の時代。大秘宝『クラルテ』。それを求めれば求めるほど世界の心は荒んでいく。一体それは、世界に何を与えるのか、そして何を奪うのか。人々の希望『神の申し子』。彼らは自分の運命に何を思うのか。従う者、背く者、そしてどちらでもない者。幾重にも重なり合う運命が紡ぎ出す真実。主人公『ヒース・クレリック』。彼もまた神の申し子と呼ばれる一人。彼とその仲間が辿り着く先に見えたのは破壊か、それとも創造か。

序（前書き）

全ての人々に

全ての心に

全ての始まりに

この物語を捧げます

序

「光？ そんなもん信用するなよ。光があるってことは、その周り
はとんでもないくらい真っ暗って事なんだぜ」

世界は未曾有の求神時代。人々は神の存在を認め、人間の闇と欲望
に支配された狂乱の時代の中で、自己救済の術を神に求めた。そし
てそれだけでは物足りなくなった民は、精神論的な神ではなく、あ
る実体としての神を求めるようになった。そう世界は、いわゆる『
神の子』の存在を認めていたのである。騒動の発端は、5年前に冒
険家イーストン・ジャンキーが15年間の旅の末に辿り着いた大秘
宝『クラルテ』。しかし、ジャンキー一行は、祖国にそれを持ちか
えることはなかった。そしてそこには肝心のジャンキーの姿はなく、
一行は皆何かに脅えるような顔でブルブルと震えていたという。1
5年ぶりに祖国の土を踏みしめた一行を待っていたのは、国民の手
厚いもてなしでも、国王からの賞賛でもなかった。待っていたのは
連邦からの処刑通告のみ。ジャンキーの仲間達は、牢屋に幽閉され、
帰還後わずか3日で処刑された。どんな高価な財宝をかき集めて
も引き換える事の出来ない大秘宝『クラルテ』、それは多くのもの
の心を魅了した。そして、世界は狂乱の渦へと呑み込まれていった
のである。腕に自信がある者、頭のきれる者、病弱な母親を持つ者、
己の欲にとりつかれた者、ありとあらゆる理由で、ありとあらゆる
人々が、大秘宝をいち早く自分のものにしようと旅に出た。しかし
未だ辿り着けた者はいない…

終わりの始まり

そしてまたここにも、クラルテの魅力に魅せられた若者が一人。彼の名前はヒース・クレリック。いわゆる『神の子』と呼ばれる人々の一人である。

「叔母さん、俺、行ってくるよ」

ヒースは、少し遅い昼食を食べながら、台所のマリに言った。

「行ってくるって何処に？」

「世界を見てみたいんだ」

「もしかしてあんた、ジャンキーの忘れモノを探しに行くって言うんじゃないだろうね。ダメだよ、やめときなっ。うちのアホ息子もそう言っ出ていったつきりもう4年になる。きつとどっかの蛮族にでも殺されたんだろうね」

マリが実際にはそう思ってはいない事は容易に想像がついた。その証拠にマリの声は震えていた。

「違う。俺はそんな宝にはこれっぽっちも興味はないんだよ。ただ世界を見てみたい。そして大秘宝を見つけて粉々に砕いてやるんだ。5年前からこの世界は何かに取りつかれたように暗く氷ってしまった。変えたいんだよっ。俺の手でこの世界をもう一回創り直すんだ」

「駄目だったら駄目だよっ！ ……もう、大切なものを失うのは嫌なんだよ」

マリの背中が震えている。

「叔母さん……。でも、俺にはできないっ。大切な何かを失うのを恐れて、目の前で失われていく人の心を指を加えて見てるなんて。今自分にできる事をやりたいんだ」

「……」

少しの沈黙を切り裂いたのはマリの言葉。

「実は昨日夢を見たんだよ。あんたがいなくなる夢。夢の中で、あんたこう言っってたよ。『たとえ明日世界が滅ぼうとも、俺は今日り

ンゴの木を植える…』」

「……」

ヒースは言葉に詰まった。

「何してるんだい。早く行きなさい。もう世界の終わりはそこまで来てるよ」

そう言うとマリはありったけの金貨をヒースのポケットに詰めた。マリは驚くほど笑っていた。その代わりヒースの顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「涙はここに置いて行きなさい。これからあんたは数え切れないほどたくさん涙を見に行くんだから」

受け継がれた意志

太陽が西の空を赤く染めている頃、ヒースは隣街を目指して、見慣れた通りを歩いていった。通りには、家を失った子供や老人が横たわっていた。親族が、クリスタルに魅せられて出ていき、一人ぼっちになってしまったのだろう。老人や子供が住んでいる家を占拠するのは容易い。マリの家もまた例外ではなかった。歩くヒースの前に、一人の男の子が立っている。ボロボロの服に汚れて真っ黒の顔。その顔の上には一際目立つ赤いニットの帽子。この帽子だけはやけに綺麗だった。ヒースが男の子の前まで近づくと、男の子が手を差し出してきた。

「兄ちゃん、何か食べるもんくれよ」

それはあまりにも強気で放たれたあまりにも弱い一言だった。

「わりい、兄ちゃん今食べるもん持ってないんだ。でもお金なら少しはある。これで好きなもん買って食べな」

そう言うと、ヒースはマリに貰った金貨の半分を男の子に与えた。

男の子は「ありがとう」と涙を浮かべた。それを見ていた、他の浮浪者達がヒースにかけより、自分にもお金を恵んでくれと言った。

ヒースは、ポケットに入っていた金貨を全て、彼らに与えた。一文無しになってしまったヒースは、それでも隣街を目指した。日が暮れる頃には隣街の宿屋の前に着いた。しかしお金を持っていないヒースは、すぐに宿屋を後にした。ヒースは町外れにある、酒場を指していた。そこには様々な地から様々な人々が足を運んでくるという。なんでも、冒険家イーストン・ジャンキーがクラルテに辿り着く1年前にその酒場を訪れた事があったらしい。お金は無かったが、少しでもクラルテに繋がる手掛かりが欲しかったヒースは酒場に足を運んだ。店に入ると、老若男女様々な人がいた。まだ10歳にも満たないような少年が腰に刀をぶら下げてカウンターに座っていた。奥のテーブル席にはヒースより何歳か年上に見える赤い髪の

女性がひよろひよろの色白の男と座っていた。他にも様々な人がいたが、そのなかで一際異彩を放つ男が一人。長い黒髪を後ろで束ねている。眼は鋭く、血が通っていないのではないかと疑いたくなるように肌が白い。そして何よりその隣の壁に立て掛けられたばかりか鎌。とてもそれを使いこなせるような体格には見えない。

「いらっしやい」

カウンターの向こう側に立っていた女が威勢のいい声で言った。

「あ、あのー、お金は持ってないんだけど……、クラルテに関する情報を知りたくて」

その瞬間周囲の視線が一斉にヒースに集まる。カウンターの向こうにいた女はヒースのほうに近寄り、何かまずいことを言ってしまったかと尻込みするヒースを連れて店の外の出た。

「あんたバカだねえ。この中じゃ、そんなこと大声でいったら目つけられてすぐにあの世行きだよ。みんな、目を血眼にしてジャンキ―の遺産にありつく手掛かりを狙ってるんだから」

「す、すみません。でも俺は誰よりも早くクラルテを手に入れたいんです」

「……!! まさかあんた……」女は何故か驚いた様子でヒースの目を見つめている。

「ど、どうしました?」

「ちょっとこっちに来て」

そう言うと女はヒースの腕を掴み店の裏口に案内した。裏口から入ると、そこは普通の民家と何ら変わらなかった。入り口のすぐ横に階段があった。それを登るように促されヒースは何もわからず階段を登った。二階には居間のような所があり、そこに白髪混じりの男がいた。

「父さん、父さん、この子の瞳を見てよ」

女が言った。

「ん? 瞳がどおしたってえ」

男がヒースの目を覗き込んだ。

「こ、これはっ！青い神眼！！ユキジ、この若者は何処のどなたじゃ。彼は、紛れもなく神の申し子じゃよ。はっはっはっ」

「やっぱり！私もそう思ってここに連れてきたんだっ」

盛り上がる二人が何のことを言っているかさっぱりわからないヒースは、しばらく二人のやり取りを聞いていたが、我慢できなくなつて尋ねた。

「一体、俺の目がどうしたって言うんですか？ゴミでも入ってますか？それに神の申し子って？そんな昔話のようなことを言われてもさっぱりわかりません。どうか俺にもわかるように教えてくれませんか」

二人は目を見合わせてくすりと笑った。

「本当に何も知らないんだねあんた」

ユキジが言った。

「その前に教えてくれないか。君は何処から来たんだね？」

「俺は隣の街から来ました。ヒース・クレリックといいます。俺の目的はクラルテを誰よりも先に見つけ出し、それを破壊する事です。あんなモノのせいでこれ以上世界が荒んでいくのを見るのはたくさんです」

「なるほど……、神々の意志は人を選ぶというのは本当のようだ。いい顔つきをしている。説明しよう。君は神の意志を受け継ぐという運命のもとにこの世に生を受けた、人々が言う『神の子』というやつじゃ。そしてその証拠が、君のその瞳だ。黒目の中に青いわっかが三重になっておる。それが青の神眼、つまり勇者の守り神『ルクラージュ』の意志を引き継ぎし者の証」

「ちよつと待ってください。『意志』ってなんですか。俺に何を引き継げと？」

「はっはっはっ」

「何がおかしんですか？」

「君にはもう神の意志が宿っているんだよ。自分ではそれがわからないだけ。だから君はそれについて何にも考えなくていいんだ。君

がやりたいようにやればいい。神の意志は後からついてくるさ。はっーはっはっ

そう言うとも男は奥の部屋に姿を消した。

「父さんはね、あの大冒険家ジャンキーの親友だったんだよ。親友っていつても父さんの方が二十以上年上なんだけどね。んで、ジャンキーもあんたと同じ神の申し子だったんだよ」

「だったらお父さんなら大秘宝のありかを知ってるんじゃない……」

「それがそうでもないんだよ。何しろジャンキーが大秘宝を見つけたのは、ここをでてから一年も後の話なんだ」

「そうですか。だったら何でもいいから知ってることがあったら教えてほしいんですが……」

「……いいよ。あんたにだったら教えてもいいかもしれないね。ここにはね、これまであんたみたいが大秘宝の情報が知りたくて数えきれないほどの人が訪れてきたんだよ。でも奴等は己の欲望に目が眩んじまって頭おかしくなった。でもあんたは違う。単にあんたが神の申し子だからってわけじゃなくてね。あんたは多分、神の意志を引き継いでなくても、遅かれ早かれここを訪れたと思うんだよ」

「……」

「私達親子が知ってるのは大きくは二つだよ。まず一つ目、大秘宝は普段は目には見えない。何か特別な条件を満たさなければそれは姿を現さないということ。二つ目はそれに関連して、大秘宝に辿り着くにはカヌイの民の力が必要ということ」

「カヌイ？」

「カヌイっていうのは、この世で唯一神との交わりを許された、太古から繁栄してきた小さな部族のこと。彼らは生まれつき不思議な力が備わっていると聞いたことがあるけど、どこに住んでいるかは今でもはっきりとはわかっていないんだよ」

「そうですか……」

「それにしてもあんたこれから先も一人で旅を続けるつもりなの？仲間とかはいないのかい？」

「仲間？ 俺今まで仲間と呼べる人に出会った事無いんです。だからきつとこの先も出会わないかもしれない」

「あんた馬鹿だねえ。仲間はぼったり出会うもんじゃない。自分から探しに行くもんなんだよ。この先、きつとあんたと同じ考えを持つ人、あんたについていきたいという人が待ってるはずさ。世界は広いんだよ、まだ誰も見た事のないようなこと、誰も知らない秘密は山のようにあるんだ。だからきつと仲間是可以る」

「ありがとう、ユキジさん」

「今日はもう遅いから、うちに泊まっていきなよ」

運命という列車へ

カーテンの隙間からの鋭い日の光で目を覚ました。そして同時に鋭い頭痛におそわれた。昨日は男のおごりとはいえ飲みすぎてしまったようだと言ったと苦い表情を浮かべた。痛む頭を抱えながら身支度をして、一階に降りた。チェックアウトを済ませ外に出る。近くの広場が騒がしく、人だかりができていた。ユニバは何だろうと広場の方に駆け寄った。

「がはは、ありがたく思え。この街はたった今から我々国富連邦の監視下におかれた。逆らうやつは厳重に処罰する。こいつのようになりたくなかったら、しっかり毎日税金を納めるように。がははっ」二メートルはあろうかというばかりでかい男が低い声で集まった民衆に詭弁を垂れていた。そしてその大男の足元には、踏みつけられるようにして一人の若者が倒れていた。大男の後ろには十人程度の取り巻きが陣取っていた。あれだけならいけるかもしれない。ユニバはカバンから短剣をとりだし息を飲む。そして飛び出そうとしたまさにその時。

「ぐふっ!!」

大男の悲鳴が上がる。大男の前に青年の姿。腹を抱えて大男が倒れ込む。どうやらその青年、己の拳一撃で、大男を撃破してしまったようだ。あんな細身の体のどこにそんな力が隠されているのかユニバは不思議でならなかった。大男の後ろの取り巻き達が一斉に青年に飛び掛かる。一瞬目の前が真っ白い光で見えなくなった。そして次の瞬間にはもう十人の手下は一人残らず地面に倒れ込んでいた。民衆は今、自分達の目の前で起こった光景を信じている。信じることができずにいる。

「あれは間違いなく神眼の力。そうとしか考えられない」
思わずユニバはそう呟いた。

「神の子だっ。こいつは神の子だーっ」

民衆の中の一人が歓喜の声を上げた。そしてそれを皮切りに大歓声が巻き起こった。ユニバははっとした。なぜなら今まさに大歓声の中心に立っているのが、昨日居酒屋に来たヤツだと気づいたからだ。「あいつ、昨日の……」

しばらくして民衆が解散していくのを見守った後、ユニバは青年に近づいた。

「あなた、昨日酒場に来て、お金はないけど……とかって言って、店員さんに追い払われてたあのあなた？」

「あつ、そうそう。それ俺っ」

追い払われてたわけじゃないんだけどなと思ったがヒースはそれは置いておいた。

「やっぱり！ 私、連邦のやつらがだいつ嫌いなんだ。だからすかつとした。ありがとね」

「連邦？ 俺はただ傷つけられてる人を見てるのが辛かったんだよ」

「あなた国富連邦も知らないの。あいつらは世界の治安を守るという表の姿に身を隠して裏では悪いことをたくさんやってるの。あいつらが目指しているのは平和なんかじゃない、征服なんだよ」

ユニバの言葉に力がこもる。ヒースはその僅かな声の震えを聴き逃さなかった。

「君はこの人間じゃなさそうだね。一体どうして旅をしてるの？」

「私？ そりゃー国富連邦を潰すために決まってるでしょ」

ユニバが当たり前のように言った。

「でも本当に国富連邦って悪い組織なの？ 確かにさっきの男は悪いやつだと思うけど……」

「疑う余地なし。あいつらは悪者、それがせーかいっ」

「でも潰すって、君一人でかい？」

「なんとかなるわよ。私、勝気な女の子だから」

「勝気ってっ。勝気でどうにかなるなら、俺の目的も何とかかなりそうだな……」

ヒースは苦笑いを浮かべた。

「あんたの目標？」

「クラルテを潰すことさ」

「クラルテを……潰す？」

ユニバは変わった物を見るように顔をしかめた。

「俺は世界を元通りにしたいんだ。創り直したい」

ユニバはもうほとんど何を言っているか耳に入れてない様子だった。
「簡単に言っちゃえばありがたーい大秘宝の所へ行って、それから世界を創り直すってことね。要するに大秘宝經由世界の始まり行きかあ」

「……」わかっているようでまるで分かっていない。きっとそうに違いなかった。

「……ねえねえ、私もその列車乗つけてよ。私は途中の国富連邦で下車するけど。途中まで一緒にいっていい？」

ヒースはとんでもない事を言い出したと言わんばかりの顔で微妙に頷く。

「う、うん」

「はいっ決まり！ さあ早く出発よっ」

ヒースは嬉しかった。生まれて始めて自分と一緒に何かをしたいと言ってくれる人が今日の前にいる。国富連邦がどうというわけでもない、何よりも仲間ができたという単純な事実が彼を勇気づけていた。

ヒースは嬉しそうにユニバに飛びついた。ユニバがそれをさらりとかわして答える。

「はやくいくよっ、創るんでしょ！ 世界をっ」
ユニバは赤い髪をかきあげて微笑んだ。

指針

「ねえ、あんた何であんなに強いの？」

ユニバが言った。

「それが……俺にもわからないんだ。気がつく人より少し特殊だったんだ」

二人は、昨日の酒場に立ち寄っていた。二人でカウンターに座った。カウンター越しにユキジが言う。「ヒース君、早速仲間できてるじゃない。しかもこんなに美人の」

「ユキジさんのいった通りでした。世の中には変わった人がたくさんいるんですね。俺に着いてきたいなんて」とユニバをチラッと見た。

「何よ、私はちょっとあんたのその力を利用させてもらおうと思っただけ。これは同盟よ、同盟」

「ふふふっ。何だかんだで二人ならうまくやっていけそうじゃないっ」

「……」

ヒースとユニバは顔を見合わせた。

「それよりね、昨日変なお客さんが来ててね」

「あっ、大きい鎌の男ですか？」

ヒースが思い付いたように言う。

「大きい鎌？ 私が言ってるのは、まだ十歳かそこらのおちびさんなんだけどね。カウンターに堂々と腰かけて、ウイスキーを注文してきたんだよ。ヒース君くらいならともかく、まだ十歳くらいにしか見えなかったもんだから、ダメだと言ったんだけどね。そのおちびさん、『私は22歳です。悪いやつに容姿を子供に変えられただけなんですよ』なんて言うんだよ。馬鹿みたいだろ？ まあ結局根負けしてウイスキー出したんだけどね」

「へえー、そこまでして酒飲みたかったんですかねえ」

ヒースが答える。それに被せるようにしてユニバが言う。

「でももしそれが本当なんだとしたらすごく面白いことですね。この世のどっかに人の外見を司る者がいるなんて。しかもそういう人が実際にいたって不思議じゃない。世の中には神眼の力なんて物騒なものがあるくらいだから」

ユニバはちらっとヒースの方を見た。

「あんた神眼を知ってるの？」

ユキジが驚いたように尋ねた。

「それを知ってるのって不思議な事なんですか？」とヒースが口をはさむ。

「んー、そんなにおかしい事ではないんだけどね、普通の人は神眼の力なんて知らなくて、単に神の子とかって風に呼ぶからね。何で知ってるんだろうと思ってさ」

「し、知り合いに聞いたんですよ。だからちょっと知ってるだけなんです」

ユニバがすかさず答えた。

「ところでさ、あんたこれからどこにいくつもりなの？」とユニバが話を変えるように言った。

「うーん、正直何にもあてはないな」

ヒースが頭を抱える。するとユキジが奥の方から何か丸められた紙を持ってきた。そしてカウンターの台の上でそれを広げた。どうやら地図を持ってきたらしい。

「これをみて。今私達がいるのがこのレインベル大陸」

そう言っただけの地図の左下にある大きいとも小さいとも言えない大陸を指差した。

「そして、こっちがアルコバレーノ。現段階で最もクラルテがある可能性が高いとされている大陸」

ユキジはそう言ってレインベルから指を斜め右上に動かし、小さな大陸の上で止めた。その大陸は地図上ではほぼ中心に位置していた。「ここにクラルテが」

ヒースが息を呑む。

「でもどうして場所がわかってるのに誰も辿り着けないんですか？」
ユニバが不思議そうに言う。

「それがクラルテが大秘宝である所以なんだよ。『そこにいくだけじゃだめ。何か特別な条件が必要なんだ』かつてここを訪れたジャンキーは父さんにこう言って旅立っていったらしいんだよ」

「ふーん」

ユニバはあまりふにおちていないような顔をしている。

「んー、じゃあ闇雲にそこを目指しても駄目って事だよなあ。ユキジさん、カヌイの民の話以外に、何かクラルテの出現条件に関する情報はありますか？」

「うーん、そうだねえ……あっ！」

「何かありましたか？」

ヒースが身を乗り出す。ユニバはといえば、隣の席に座る男にナンパされ、すでに話は聞いていない。

「前にここに来た客が酔っぱらった勢いで教えてくれた事があるんだ。『国富連邦は誰かがクラルテを見つけてしまうのを恐れている。だからやつらはカヌイの民を絶滅させる気だ』でもこれが本当かどうかは分からない。でも急いだ方がいいことは確かだね。そして連邦の人間とうまくコンタクトが取れば何か情報を聞き出すことが出来るかもしれない」

「クラルテを恐れている？　どういうことだろう。ねえユキジさん、連邦の本拠地は何処なんですか？」

ヒースが尋ねた。

「ここよっ」とすかさず地図の左上にある大陸を指差した。ユキジではなくユニバだ。

「ここに行く用事できたんだ。じゃあ私途中下車しないでいいんだねえ」

ユニバが嬉しそうな声をあげた。

「じゃあ決まりねっ。次の目的地は連邦の総本山、エストラーダ大

陸。そんでカヌイの民を一刻も早く見つけなきゃ」

ユキジが自分に行かない癖に場をしきるように言った。

「よし、そうと決まれば早速出発だ。」

ヒースが歓喜の声をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5562j/>

creations for the destruction

2010年10月14日14時59分発行